主日礼拝　　2020年１１月２２日（日）

題　「収穫を感謝する」

テキスト：ルカによる福音者１２章：１３～２１節

（聖書の個所は最後にあります。）

今日は、収穫感謝・謝恩日の礼拝をこのように捧げることができますことを感謝いたします。収穫感謝日は、秋の収穫を神さまに感謝する時です。旧約聖書時代に収穫を神さまに感謝する起源はありますが、日本に伝えられたのはイギリスから現在のアメリカ合衆国のマサチューセッツ州のプリマスに 1600 年代の始めに宗教的自由を求めて移住して来たピルグリムと呼ばれる入植者の一団が、本国イギリスから持ってきた種子などで農耕を始めたところ、現地の土壌に合わず飢饉による餓死者まで出したところ、アメリカ先住民の助けにより危機を脱して作物の収穫ができ、そのことを神に感謝し、その感謝を表す目的で 1621 年に先住民を招いて収穫を祝う宴会を開いたことにあるとわれています。

現在のアメリカは新型コロナウィルスの爆発的な感染拡大に加え、大統領選挙後の混乱で大変な状態ですが、早く落ち着いて、かつての良かりしアメリカの姿を取り戻してほしいと願い祈っています。

また今日は、日本キリスト教団では信徒の方々の祈りと奉仕により謝恩日とされ儲けられた日で、長く牧師として務められ、隠退された牧師を覚えて守られています。具体的には、隠退された牧師の老後を支える謝恩日献金を捧げています。

さて、今日の聖書の個所は「財産問題」のことです。

以前お話ししたことがありますが、宗教改革者のマルチン・ルターの説教に「死の準備教育」というものがあります。ルターはその中で二つのことを教えています。

一つは、自分の持っている何がしかの財産は自分の死に際して、残る者への財産のことで争いが起こらないように気をつけること。そのために生きている間に対処しておくこと。とても現実的な勧めです。財産を巡る争いは洋の東西を問わず、時代を超えて起こるということです。

そして二つ目は、自分の魂の問題を解決しておくように。すなわち神の前に己の心、魂の平安を保つということです。これが難しいことのように思えます。

主イエスは、「わたしの元に来て安らかでいなさい。」と招いてくださっていることを覚え、そのことを忘れずに平安を得たいものです。

今日の聖書から学びましょう。

◆「愚かな金持ち」のたとえ、です。

イエスの元に頼みに来た人がいました。
13:群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるよう
に兄弟に言ってください。」と。
「兄弟」とありますが、他の聖書の訳では「兄」とあります。
古代の家督は長男に継がれ、遺産は長男が多かったようです。以前、仕えていた教会で親の死後、
姉弟で財産を巡る問題が起こり、苦い経験をしたことがあります。

聖書では頼みに来た人に対して、
14:イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判
官や調停人に任命したのか。」と。
イエスは相談に来た人が望んだようには答えられませんが、根本的なことを教えられたのです。
一つのことを言われ、たとえ話をされました。
聞いた人がどうするかはその人の問題であり課題です。
15:そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しな
さい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどう
することもできないからである。」
主イエスは富が悪であるとは言われませんし、そうみなされておられないのです。ただ富の限界をたとえ話で教えられたのです。
『貪欲』とは何でしょうか。広辞苑によれば貪欲とは「自己の欲するものに執着して飽くことを知らないこと。非情に慾の深いこと。」とあります。金銭に対する欲が一番分かりやすかもしれませんが、それ以外にもいろいろあると思われます。
すべての貪欲に共通しているのは「もっと、もっと」と自分に迫ってくる力、心のことかと思います。どんなことにも当てはまるのだと思います。「あれがほしい、これがほしい、もっと、もっと」「こうありたい、こうあってほしい、もっと、もっと」と。それは自分も気付かないうちに自分を縛り、人を支配し、苦しめる力となりかねないのです。考えてみると資本主義社会の現実なのかもしれません。資本の論理とか昔から言われますが、自己増殖していくかのような力です。こどのも教育などでも親の中にあらわれたりします。つまり貪欲はわたしたちどんな人の中にもある心の激しい動きだと思います。
ですからイエスさまは、貪欲には「注意を払い、気をつけなさい。」と貪欲はどんな人間の心にあるから、貪欲から自分を護りなさい、と言われるのです。貪欲は人間関係を傷つけ、ついに破戒し、その人自身をも破滅へと連れて行く

危険性があるのです。信仰者にとって大切なことは神さまの前に静まって、自分の心を保つこと。それが礼拝の時なのです。

財産について言えば、「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」と言われます。人の命、人の幸せは持ったものにはよらない幸せは財産の多さではないということです。自分の命は自分の所有物から生まれるものではないのです。

ここから、たとえ話です。

16:それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。

17:金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、」とあります。

ここには感謝することが欠けていました。すなおに喜ぶことをできなかったのです

なぜなら、収穫があるとすぐに貪欲の芽が育ち、「もっと、もっと」との支配下に入ってしいやすいのです。そうではなく「これはある。これがある」と思える事の方が気持ちが楽になりますし、隣の人との関係も良くなって行くのではないかと思います。

18:やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、

19:こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』

18 節に。「もっと」という言葉が出て来ています。「もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、」となるのです。これは黄信号が灯った状態とも思えます。

19 節ではこう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽 め」と。』

自分で自分の魂に言うのです。「わたしの作物、わたしの倉、わたしの魂」。自己中心の支配下です。もうこれは、貪欲の赤信号が灯っている状態ではないかと思えます。

20:しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。

21:自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」「愚かな者よ！」との神の鉄槌が降るのです。

人間生きるために食べ物は必要ですし、着るもの、住む場所も必要です。

神はご存じです。

命は神様のものです。自分の持ち物で命は買えません。

神さまの前に心豊かで平安であることが何より一番の幸せの状態なのだと思えます。そして人とつながり分かち合えることは幸いなことです。

今日の収穫感謝の日に、わたしたちは主イエスさまが教えてくださった
野の花、空の鳥を養われる神さまの愛の支配を覚え、身と心を委ねながら
これからの日々を生きて行きたいと願います。

◆「愚かな金持ち」のたとえ

13:群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」

14:イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」

15:そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

16:それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。

17:金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、

18:やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、

19:こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』

20:しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。

21:自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」